春夏秋冬 台湾徒然

第十五回 新幹線で揺れる鉄道労働者

柳本通彦

やなぎもと・みちひこ　京都市生まれ。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦（現代書館）」「台湾革命（集英社新書）」など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

現在台湾では、２００５年秋の開業を目指して、高速鉄道の建設が進められている。入札は紆余曲折を繰り返したすえ、日本の新幹線の採用が決まっており、台北―高雄間３４５キロを１００分程度で結ぶ予定である。

現在の特急が最速でも4時間以上かかっているので、台湾の二大都市間の距離は一気に半分以下に縮まる勘定で、人の流れが変わる、台湾経済の活性剤になる、とその波及効果に大きな期待が寄せられている。

しかしその陰では、泣く人もいる。台湾新幹線の経営主体は、台湾高速鉄路公司という新たに組織された民間会社で、一方在来線のほうは公営の台湾鉄路公司（以下「台鉄」）である。両者は異なる二つの会社であり、台鉄の人たちが新会社に採用される保証は全くない。

台鉄は、3本の小さなローカル線を除けば、台湾本島をぐるりと一周しているに過ぎない。その主要幹線の台北―高雄間に新幹線が開通すれば、経営的に壊滅的な打撃を受けるのは必至で、事実上、台鉄は大都市と近郊を結ぶ郊外電車に矮小化するとみられ、台湾当局も経営を事実上放棄する民営化策を打ち出している。

そこで黙っておれないのが、当然ながら、台鉄で働く労働者、労働組合の人たちである。昨秋9月には、台湾始まって以来という、台湾鉄路労組の組合員総会が総統府前広場で決行された。全台湾の拠点がいっせいにストライキをして立ち上がり、1万５０００名の組合員のうち約８０００名が雨の台北に集まった。

労組は、当局の進める公司化（企業化）ならびに民営化政策に対して全面反対を打ち出し、その要求が受け入れられない場合、旧正月休み7日間の全線全面ストライキを賛成絶対多数で決議した。

当日の集会は、連帯の挨拶に訪れたＪＲ総連の人をして「懐かしいですね。もう日本の労働運動はなくしてしまいました」と言わしめるほどの熱気だった。

公営事業の民営化は、20年前に日本が遭遇した試練である。台湾もここ数年のその動きが顕著で、電力、電信、煙草、酒造、精糖、精油などの事業の民営化が取りざたされ、各企業体の労働運動がかつてなく活発になっている。

もともと労働界は、現職の陳水扁総統の支持勢力であったのだが、政府批判を強めている各公営事業労組にどう立ち向かうか、陳政権はここでもひとつの試練に立たされているといえよう。

台湾の人たちにとって、もっとも大切な節句である旧正月、多くの人たちは故郷に帰省し、妻の実家に顔を見せるのが習慣である。狭い島の中を人びとは東西南北に大移動を繰り広げるわけで、主要交通機関が全面ストップするような事態になれば、3月に迫った総統選において、陳水扁氏の再選は黄信号からはっきりと赤信号が灯ることになろう。

台湾に鉄路がしかれたのは、清代の１８８７年である。それを日本が引き継いで拡充整備し、およそ10年前によううやく線路がひとつの輪になった。三代にわたる長い歴史を走ってきた台湾鉄道がいま存亡の危機に立っている。

鉄道労組の決起集会（2003年9月・台北）